

暑い夏を乗り切る！ 「にじのきらめき」の栽培方法

一 はじめに

令和3年度に高温耐性・収量性・耐倒伏性・食味に優れた「にじのきらめき」を奨励品種に採用し、現地に普及させてきました。

しかし令和5年と同6年は観測史上最も暑い気温となり、「にじのきらめき」においても収量の低下や一等比率の低下が発生しました。

二 異常高温による減収と品質低下

令和6年の水稲栽培期間の平均気温は、平年比+2.1℃/日と著しい高温（図1）であり、本県産「にじのきらめき」の農産物検査等級の一等比率は46%（前年比マイナス29%）まで低下しました。

当研究所においても本品種の4月下旬移植での試験成績は、平年（過去7年の平均）と比べ収量が17%減少（図2）、外観品質（数値が小さいほど高品質）は1.8ポイント不良となりました（図3）。

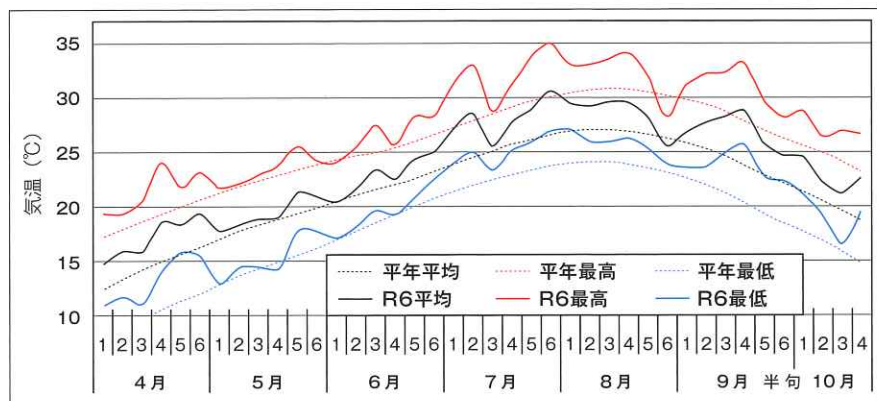


図1 令和6年度の気温（磐田）

原因は白未熟粒の発生と茶米の増加でした。

三 栽培方法の再検討

そこで当所は「にじのきらめき」の栽培方法を再検討し、栽培層の内容を見直しました。検討内容は以下の項目です。

- ① 施肥量
- ② 追肥量
- ③ 刈取適期

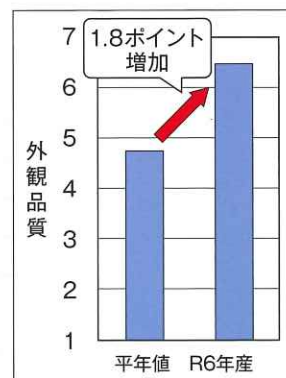


図3 外観品質
※数字が低いほど高品質

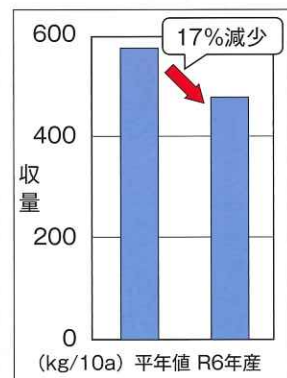


図2 収量

四 試験結果

「にじのきらめき」の精玄米重収量と籾数の関係を調べた結果、収量600kg/10aを達成するための籾数は28、200粒/m²でした（図4）。その籾数を確保できる幼穂形成期（幼穂長1〜2mm時）の生育量（草丈×莖数）は、31.1千cm²/m²で

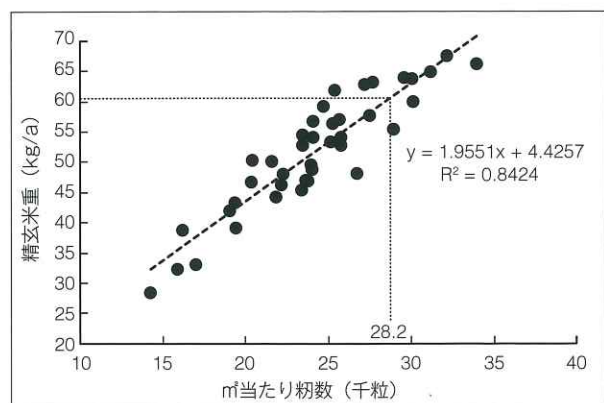


図4 籾数と精玄米重（収量）の関係



静岡県農林技術研究所
水田農業生産技術科
上席研究員
山下 達也

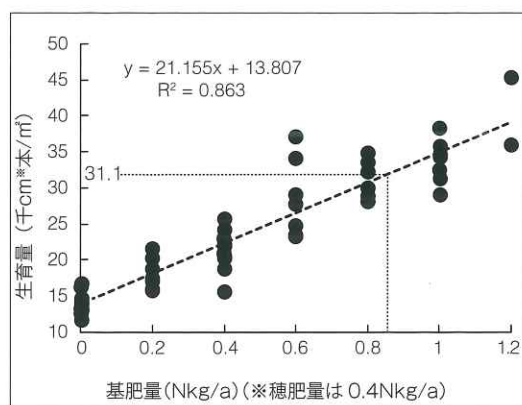


図6 生育量と基肥量の関係

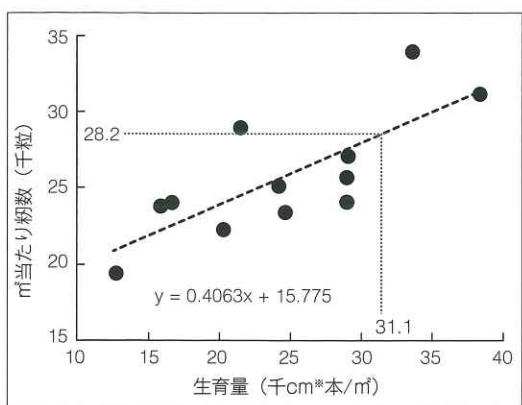


図5 生育量（草丈×莖数）と籾数の関係

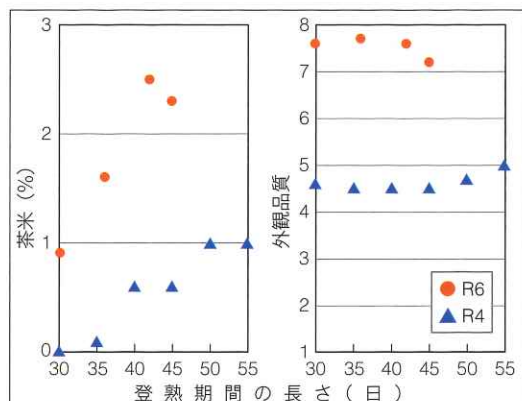


図8 登熟期間の長さとお観品質・茶米の関係

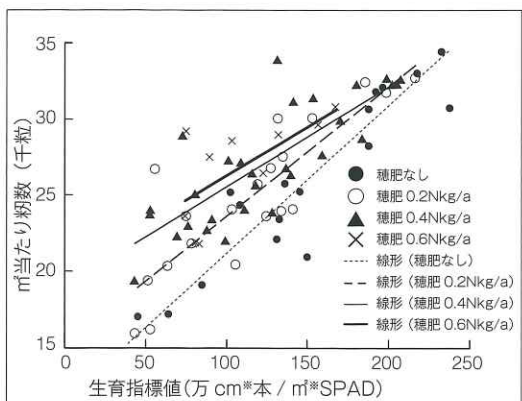


図7 生育指標値と基肥量の関係

あり（図5）、これを達成するために必要な基肥N量は約0.8kg/a（図6）、穂肥N量は約0.4kg/a（データ略）であることが明らかになりました。

幼穂形成期の診断で生育量が不足している場合は穂肥を増肥すること、必要籾数が確保されました（図7）。また、出穂から収穫までの日数（登熟期間）と外観品質との関係を再調

五 栽培層の改定

これらの試験結果などから栽培層を改定しましたので、以下に概要を示します。

肥料は一発肥料の場合は早生用の銘柄を使用し、施肥量は10.8Nkg/10a程度とします。なお、側条施肥の場合はこれから一〇割減肥可能です。

幼穂形成期に莖数が400本/m²以下であった場合は、穂肥を2Nkg/10a増肥します。一発肥料の場合は穂肥時期（出穂25日前・幼穂1mm）に2Nkg/10a追肥します。

収穫時期の判断については、本品種は止葉が穂にかかり帯緑歩合が判断しにくいので、出穂後36〜43日（出穂後からの積算温度は、1、100〜1、250℃）、帯緑歩合5〜10%程度で収穫します。さらに遅れ穂が多く、青未熟粒が懸念される場合は収穫時期を右記の範囲で数日遅めにします。降雨が多く刈り遅れ、茶米の発生が懸念される場合は収穫時期を上記の範囲で数日早めます。

また、登熟期間の高温が予想される場合は、出穂期前後に1Nkg/10

a追肥します。

「にじのきらめき」は葉色が濃いので紋枯病、カメムシ類、コブノメイガ、ウンカ類の発生に注意し、適切に防除します。

おわりに

品種特性に応じた栽培技術を組み合わせ、高温条件下でも品質と収量を確保しましょう。

栽培層の改定と同時に「にじのきらめき」の栽培方法を「コシヒカリ」と比較したチラシを作成しました。左記QRコードから入手できますので活用ください。



お問い合わせ先

磐田市富丘678-1

静岡県農林技術研究所

水田農業生産技術科

Mail: agrisuden@pref.shizuoka.jp

TEL: 053-88-3366